

城山麓の碑石 (一)

先人の跡をしるぶ

山 本

(会員・佐伯市池船)

保

一 城山還原之碑

城山還原之碑は三の丸上の段、城山登山口にある。以前は三の丸広庭の一隅に建っていたが、昭和四十五年十一月、佐伯文化会館着工のため現在地に移された。

石碑は御影石、台座は凝灰石で総高四メートル余り、壮大且つ重厚な構えである。書家としての誉れ高かった故子爵毛利高範の雄渾な楷書が刻みこまれている。

「慶長六年、我祖養賢公就封、相収於佐伯之邑、築

城於鶴谷山、山拔海約百八十尺、広褒凡肆拾陸町、
(四十六町) 周圉壺里強、前臨市街、云々」

城山は佐伯藩毛利氏の居城であったが、明治二年版籍奉還によって国有林となり、同三十五年二月、特売の許可を得て再び毛利家の所有となった。そのことを永く伝

えるため、同四十四年九月、この記念碑を建立した。

その経過の概略は次の通りである。

○明治二十二年九月九日、旧城山松下ゲニツイテ、山中盛太郎熊本出張。

○明治二十三年六月三十日、熊本大林区署長広岡逸人來伯ス。城山松下ゲ再願。養賢寺参拝。

○明治二十五年十一月五日、山中盛太郎上堅田村大越へ。日ニ新聞ヲ見ズ、耳ニ俗語ヲ聞カズ、溪山無人ノ風景、伐木丁々ノ響、溪流潺湲(センカン)ノ声、村酒数杯、仙境ニ入ル思アリ。

○明治三十二年六月三十日、熊本出張、局長ニシバシバ陳述、局長タダ首肯スルノミ。局長ノ意ヲ動カスニハ、一番喝(カツ)ヲ入レンニハ如何ト。

毛利家の代表(執事山中盛太郎||四代佐伯町長)は、

明治二十二年九月から同三十四年二月まで、たびたび熊本宮林局へ出張して陳情請願した。足かけ十三年ようやく毛利家の所有になった。

佐伯藩政史料の中に官林交換地山代に関する約定書類などがあるが、思えばこの城山は三百八十年の昔から、佐伯城市とともにあり、いま佐伯市の象徴として五万余市民の誇りになっている。

二 国木田独歩文学碑

還原之碑から翠明台公園登り口方面へ行くと、国木田独歩の文学碑がある。これは昭和五十年二月、佐伯ロータリークラブが創立十五周年を記念して建てたもの。独歩の「豊後の国佐伯」から選んだ一文、かの有名な「城山の賦」ともいべき絶唱である。書は白井龍峯。

佐伯の春先づ城山に來り

夏先づ城山に來り

秋又た早く城山に來り

冬はうど寒き風の音を

先づ城山の林にきく也

城山寂たる時 佐伯寂たり

城山鳴る時 佐伯鳴る

佐伯は城山のものなればなり

記念碑の傍にある「独歩と城山」の説明板には

これは、明治二十六年九月鶴谷学館の教師として招かれ、佐伯に來た国木田独歩が、わずか一年足らずの在職であったが、その著「豊後の国佐伯」に

余が始めて佐伯に入るや、先づ此の山に心動き、余己まに佐伯を去るも、眼底其景容を拭い去る能はず；

とまでのべ、城山についてうたい上げた絶唱の一部である。独歩は明治四十一年六月二十三日、三十八才の若さで病没した。

しかし、独歩の文学は、彼がこよなく愛した佐伯の市街と、これをめぐる番匠川の流れ、昼なお暗い城山の樹木、古城の面影をしのばせる石垣、その城跡からの海や山のすばらしい景観とともに、この城山に登る人々の共感を呼んで、いつまでも残ることでしょう。

佐伯市商工観光課

と明示されている。

「豊後の国佐伯」は、独歩が佐伯を離れて十か月後（明治二十八年五、六月）、国民新聞に発表した作品で

あり、当時二十五才の若さだが、春夏秋冬の城山のようすを端的にとらえている。

三 矢野龍溪詩碑

矢野龍溪顕彰碑は、三の丸広場にある。

萬里之洋 千仞之岳

天地秀靈 其俗淳厚

結成十五周年記念

一九七五・一〇・二六

佐伯ライオンズクラブ建立

臼井龍峯書 宮谷石材店刻

この碑文の詩は、明治四十五年龍溪が佐伯中学校（佐伯鶴城高校）開校記念のために帰郷した際、城山より佐伯湾を望み、尺間山・彦岳を仰いで、ふるさとの風土のすばらしさをたたえた漢詩である。

佐伯を歌った詩の中では、最も秀逸であり、わずか十六字のうちに自然、気候、人柄などを端的に表現している。なお矢野龍溪自筆の書幅は、市指定重要文化財として、教育委員会に保存されている。

龍溪より委嘱された徳富蘇峰は、私立鶴谷学館数学・

英語教師に国木田独歩（早稲田大学中退）を推薦した。

毛利家第十三代高範（熊本県宇土出身）は、蘇峰と同じ熊本県人であり、高範・蘇峰・龍溪そして独歩の結びつきは、そこから生まれている。

龍溪は嘉永三年城下西町（現在の佐伯幼稚園内）に生まれ、佐伯藩校・四教堂、慶応義塾大学に学んだ。

卒業後、郵便報知新聞副主筆となり、自由民権論を主張していた板垣退助を支持した。さらに藤田茂吉（佐伯市出身）、犬養毅、尾崎行雄などの三田派（慶応大学出身）の人材を集め、立憲政治のあるべき姿を提唱した。

また政治小説『経国美談』は青年層に愛読され、ベストセラーとなり、思いがけない印税によって、彼は明治十七年四月から十九年九月まで、ヨーロッパへ留学した。帰朝後、宮内省式部官、清国特命全権公使、大阪毎日新聞社副社長を歴任して、昭和六年六月十八日、八十四歳で死去した。

四 中根貞彦歌碑

三の丸櫓門（通称黒門）を通過して、右手に登っていくと、きれいな芝生の中に歌碑が立っている。見事な草書

体で、自然石に

ふるさとの移ろふ

もうし婦るさと登の

かはらぬも宇し

はしき布る里

昭和二十七年四月春

七十四翁中根貞彦

と彫り込まれている。

関西の三和銀行初代頭取であり、アララギ派歌人の翁は、臼杵町生まれ、小学校卒業後、佐伯町旧藩士中根祚



中根貞彦歌碑

胤の養子となったので、第一、第二の故郷を持つようになった。

臼杵町は、徳川時代稲葉家の臼杵藩（五万石）であり、佐伯町は、毛利家の佐伯藩（二万石）で、言語・風俗・習慣などに違いがある。

故郷が変化・発展していくのも心が重く、また、昔のまゝであることも気がかりなことであり、いずれにしても、なつかしい恋しいふるさとであると、その心境を吐露している。

この望郷の歌碑と、臼杵公園にある翁の孝養の歌碑（ちちのみの ちちはわを見ず ははそはの はははわが知らず 恋しき父母）は、いずれも代表的な歌碑である。

高度経済成長に向かう昭和二十七年春、翁を慕う人々が浄財を集めて建立した。

裏面には安藤正人選文（元佐伯市長）菅一郎画伯書による。

（前略）温厚篤実誠ニ高潔ノ至人デアル。殊ニ愛郷ノ情深ク、郷土ノ為ニソノ勞を吝^わマナカッタ。（中略）桃李（モモ・スモモ）ハ言ハザレドモ、下自ラ蹊ヲ成ストハ此謂カ」と記されている。

近ごろ、地方の時代と叫ばれているが、残さねばならぬものは何か、変えていかねばならぬものは、なんなのかをよく見極めて、幸せな世の中を築きあげていくという要請に、わたしたちは迫られている。

五 野村越三胸像

三の丸櫓門を入ると、すぐ左手の桜樹の中に、野村越三先生の胸像が立っている。

野村先生像 昭和三十五年一月再建とある。

この胸像は、先生の教え子たちが追慕し、その徳をたたえて、昭和の初期、馬場の松近くの養賢寺前広場に建てたが、太平洋戦争中供出のうき目にあつて、とりはずされた。

しかし、幸運にも、そのままの姿で保管されていたので、先生を思慕する人々は、同志に呼びかけ再建した。

胸像の前にたたずむと、教育実践家・スポーツ指導者としての先生の風格と威容に接し、また台座の説明文によって、往時をしのぶことができる。

野村先生は、旧藩時代の家老職斎藤家に生まれ、鶴見町大島の野村家へ養子入りをした。

明治四十年四月から大正二年三月まで六か年、佐伯小學校代用教員（臨時講師）として、偉大な業績を残した。

更に、佐伯中学校（佐伯鶴城高校）のスポーツ指導者に迎えられ、余暇の時間は一般青年の体育にも精魂を傾け、県南地方の学校、社会体育の基礎を確立された。

進歩的な彼は、県下にさきがけて、短距離走にクラウティングスタート、ランニングユニホーム、スパイクシューズなどの使用にふみきった。

このような人がらと指導力が認められ、大正十三年和歌山高等商業学校（現和歌山大学）学生監に就任した。たちまち学生の信頼を集め、将来に大きな期待をかけられたが、病にたおれ、借しくも翌十四年四月二十九日四十一歳で死去した。市内中央区嶺雲山潮谷寺（浄土宗）に葬られている。

市教育委員会は、スポーツ方面で優秀な成績をあげた市内中学生に、毎年「野村体育賞」を授与して、体育奨励の一助にしている。

六 中島子玉の墓

城下西町の碧松山久成寺（日蓮宗）に子玉の墓がある。

大智院徳勇日健居士

天保五年三月十五日

恩師広瀬淡窓の碑文四百十一字も刻まれている。
淡窓の『懐旧楼筆記』には

「予が門下生数千、コノ人ヲ以テ第一ノ英才トス。ワ
レ、カツテ之ヲ品シテ、ソノ才、頼山陽ガ下ニ非ズト
言ヘリ。ソノ人ニ至ツテハ、山陽ヨリ賢ナルコト遠シ
と激賞している。

文政元年（一八一八）咸宜園を訪問した山陽は、淡窓
と対談したが、子玉の詩文を一読して驚嘆した。
後年、山陽は

ワレ、西遊シテ三絶ヲ得タリ。山水に耶馬溪、人物



中島子玉墓

ニオイテ中島子玉、……

と友人に説明し、紹介したと伝えられている。

文化十三年（一八一六）明石秋室の推せんで、日田咸
宜園に入学し、さらに文政六年当時の最高学府、昌平校
（江戸）へ留学して、林大学頭の知遇をうけ、『日本新
学府』『美人十二詠』の詩集は文意が深妙で、詩想が優
雅であると称賛された。

文政十一年佐伯へ帰藩し、四教堂教授となつて、熱心
に子弟の教育に当り、その校風を振興させ、また弟子高
妻芳洲の才器が卓越していることを察知し、日出藩（木
下家二万五千石）学者帆足萬里塾に入門させた。

佐伯文庫を徳川幕府へ献上した際、家老関谷隼人（温
故知新録編述）、書物奉行明石秋室を補佐して、積極的
に事務処理に当たった。

天保五年（一八三四）三月十五日惜しくも病死した。
享年三十四歳であった。辞世の漢詩は次の通りである。

高情自與世人違

我是南豊一布衣

三十六鱗猶欠二

今朝化天上龍飛

子玉の死後、芳洲は師の期待に答えて、佐伯藩教育の
隆昌に寄与した。

(つづく)